

武即天について

武則天については、漢の時代の呂雉（呂后）、清の時代の西太后とともに、中国三大悪女の一人として数えられている（他にも殷の時代の妲己がこれに加えられることもあるらしい）。歴史の教科書では則天武后と記されていたような気がする。唐の時代が3代続いたところで実験を握り、史上初の皇帝となり（後にも先にも中国では彼女しかいない）、国名を周と変え、15年に渡って君臨したという女傑である。

ひょんなことから彼女のことに興味を持ち、例によってまたいつもの癖が出て、色々掘り葉掘り調べていくうちに、思わぬ事実突き当たり驚いている。勿論、そんなことは歴史に詳しい人からすれば、周知の事実と一笑に付されるかもしれないが、データを拾い集め、点と点を結び付けていく作業は、いつものことながら想像を膨らませ、新たな視点を生み出してくれる。

最初に全体像を記しておこう。武則天は624年の生まれ。僅か14歳で唐の第2代皇帝、太宗（李世民）の後宮入りとなっている。この時、太宗はすでに40歳。649年には51歳でその生涯を終えているから、意外に在位期間は短く23年にすぎない。皇帝が没した後、当時の慣習では、後宮の女性はみな寺に入るのであるが、何せ武即天はこの時まだ25歳である。大変な美貌と才覚の持ち主であったらしいから、世間が放っておくわけがなかった。

彼女はその後すぐに、第3代皇帝となる高宗（李治）の側室に迎えられ、そこから権謀術数の限りを尽くし、皇帝にまでのし上がっていく。この間、謀反あり、毒殺あり、その極悪非道の限りを尽くす、というのが三大悪女とされるゆえんであるが、それ以上に封建的な男社会を、女性が、それもたった一人で崩壊させたことが、歴史を語る男たちには許せなかったのであろう。男であれば、むしろ英雄として好まれる人物である。それにしても、冷静に考えれば、ある日突然に世の中が変わることなど、古今東西あり得る話ではない。時間をかけ、ゆっくりと権力を掌握していったはずだ。

調べてみると、高宗は彼女の4つ年下で病気がちであったらしい。とは言え、在位期間は34年であり、55歳で病没したのであるからお父さんよりも長生きしたことにある。目を引いたのは、660年、高宗32歳、武即天36歳の時、中国はそれまでの皇帝という中央集権制度を止め、天皇、天后、という称号での共同統治にシステムを変更しているところである。そしてこの天皇という呼び名は、日本に輸入され、現在まで続いている。更に、その3年後、663年には日本史で習った、あの有名な“白村江の戦い”が起こり、唐・新羅連合軍と、日本・百濟連合軍が朝鮮半島で戦っている。日本はここでボロ負けする。

では、当時の日本を深掘りしてみよう。聖徳太子が小野妹子を遣わしたとされる遣隋使は600年である。学校では中国の文化を学び、交流を深めるためと習ったが、そんな甘い話のはずがない。調べてみると、日本はこの時代にそれまでの倭国という名前から今の日本へと名称変更を行っている。645年に大化の改新が起こり、それまでの政界を牛耳ってきた

た蘇我氏が駆逐され、中大兄皇子と後の藤原家が支配するようになるのだが、この背後には大国である唐の圧力があつたとみられている。当時の朝鮮半島は、高句麗、新羅、百済が割拠し、日本は百済と仲が良かったのであるが、唐は悲願である高句麗征伐を続けていた。その延長線上には日本がある。

例えば、白村江の戦いにボロ負けした後、中大兄皇子は天智天皇に即位してすぐ、難波から近江宮へと遷都を果たすが、これは唐・新羅連合軍が日本を攻めてきたときの防御を考えてのことだろう。また、この時代より防人の制度が広がり、若者は皆、徴兵されていくことになる。九州では大宰府、大野城などが築かれている。唐・新羅の脅威は相当のものであつたはずで、だからこそ情勢を伺い外交努力を続けるために、高いリスクを承知で遣唐使を何度も派遣したのであろう。

さてその唐であるが、元々は朝鮮半島には手を焼いていたらしい。唐の前の隋が崩壊したのも、度重なる高句麗遠征に失敗したためとされている。武即天が後宮入りした第2代太宗の時代にも、高句麗遠征は失敗している（644年）。しかし、高宗の時代になり、それまでの戦略を変え、新羅と結ぶことで唐の覇権は急速に広がっていく。661年、667年と唐は高句麗に出兵し、ついに668年に滅亡させることに成功している（白村江の戦いは、唐にとってはその遠征の中での小さなエピソードに過ぎない）。この時代、武即天はすでに天后に就任しているわけであるから、少なからずこの戦略に加担していたことになる。大げさに言えば、未開な倭国を現代に続く日本へと、間接的に導いた重要人物であつたのかもしれない。

683年、高宗が55歳で病没してから、武即天は無能な皇太子たちを差し置いて、政治の実権を握る。この時代、唐の黎明期を支えた上流階級たちと、隋の時代に始まった科挙の制度からのし上がってきた新興勢力との間の抗争が絶えなかつたらしい。どうやら武即天はこの新興勢力の親分であつたようだ。その力を利用し、ついに690年には名実ともに本当の皇帝となる。数えてみれば66歳の時である。それから81歳で亡くなる直前までの15年間、彼女は中国史上唯一無二の女帝として君臨する。しかし彼女が亡くなるとまた昔の唐の時代に逆戻りし、相も変わらぬ権力闘争が繰り返される。

では武即天の功績は何もなかつたのかと言うとそうではない。高宗から武即天の時代に、唐の版図は急拡大し、朝鮮半島の支配が固まる。東方の敵国は日本だけとなるのである。国内も安定し、農民の反乱や内乱なども起きてはいない。何よりも、武即天以降の皇帝は、唐の時代が終わる907年まで、その後17代にわたって、武即天の血族から生まれている。彼女のDNAが200年以上の長きにわたって受け継がれていったのである。

ひょんなことと言うのはテレビドラマ“武即天”にはまったことである。武即天を演じたファン・ビンビンの名前は聞いたことがある人もいるだろう。

<http://www.twelvy.co.jp/event/busokuten/>

当然のことながら、TVドラマは、愛と憎しみが交錯し、裏切り、陰謀が繰り返されていく筋書きである。ただそんな中で、権力が集中することの危うさ、それが失敗した時の代償の大きさ、縁故ばかりに頼りすぎるシステムの馬鹿馬鹿しさを教えてくれるのも、皮肉なことに共産党に支配される中国TVであったというところが、逆に面白い。唐という国を、オーナーが支配する巨大企業に置き換えても面白いし、いつだって朝鮮半島の問題は中国の弱点であることもまた興味深い。すべてが知りたくてDVDを全巻買ってしまった。丁度、連休の間に全部見終わったところである。